

昔話考

「動物昔話」と「笑い話」をめぐって

● 金 成 陽 一

はじめに

グリム兄弟は彼らが編纂した「ドイツ伝説集」(Deutsche Sagen)の序文で、「(童話は)すぐに栄養となり、まるでミルクのように口当たりが良くまろやかで、蜂蜜のように甘くこの世の困難さを取り除いて、満足させてくれる⁽¹⁾」と述べている。これに対して「伝説はずっしりとした料理で、より深く思索されることを要求する」と続く。ゲッティゲンのサンスクリット研究者テオドール・ベンファイはこの点について、「昔話は楽しませようとし、伝説は教訓を与えようとする⁽²⁾」と更に簡潔に表現した。しかし伝説と昔話の厳密な領域を規定するなど困難で、実際にはこれらは互いに重なり合っている部分も大きいのである。一つ明確に異なっているのは、昔話が「むかし昔、あるところに～」といった出だしに象徴されるように、時代や場所をまるで問題にしないのに対して、伝説はそれらを特定していく点だろう。

昔話の分類としてはThe Type of the Folktale⁽³⁾(昔話のタイプ)の中で、「本格昔話」に「動物昔話」(Animal Tales)と「笑い話と奇談」(Jokes and Anecdotes)を加えたA・アールネとS・トンプソンの構成が、関敬吾によって日本にも取り入れられ、現在ではこの分類がほぼ定着している。

筆者は以前「本格昔話」について既にいくつか述べてきたので、この小論では特に「動物昔話」と「笑い話」にスポットを当ててみたいと思う。

動物昔話 — 異類婚姻について

人間と動物が結婚をする所謂「異類婚姻」の話は「グリム童話」にもいくつか載っており、それらをKHM(Kinder-und Hausmärchen)の順に挙げてみると、「蛙の王様」(KHM1)「三人姉妹」(決定版にはない)「なきながらピョンピョン跳ぶひばり」(KHM88)「ハンス坊ちゃんハリネズミ」(KHM108)「森のなかのばあさん」(KHM123)「鉄のストーブ」(KHM127)となる。これらの作品に共通しているのは全てが「異類婿」の話となっていることだ。雌の動物が、親切にされた若者に恩返しのため美しい女の姿で現れて結婚するといった日本昔話のような展開はヨーロッパにはほとんどない。その理由として考えられるのは、やはりキリスト教と仏教(神道)との違いだろう。キリスト教徒にとって人間と動物は完全に断絶しているのだから、たとえ昔話の中であったとしても動物が(神の似姿をした)人間になれることなど絶対にあり得ないのである。人間が何らかの魔法によって一時的に動物に変えられることはあっても、動物が人間になるなどとんでもない話なのである。

「グリム童話」の中の男たちが魔法で変えられる動物としては、蛙・鼠・熊・ライオン・小鳩・等々と多彩であるのに対して⁽⁴⁾、日本では「古事記」にも出てくる「蛇婿入り」や、その強い影響を受けたと思われる「河童婿入り」、そして全国各地に伝わる「猿婿入り」ぐらいしか見当たらない。これ以外に、たとえば「おしらさま」(遠野物語)の「馬と結ばれる娘の話」や「蛙報恩」などはあるものの、数は非常に少ない。だからこれ以外の「動物婿話」は恐らく、昔(とは

いっても江戸後期か明治初期頃か) 海外からの影響の下に出来あがってきたのではないかと考えられる。(たとえば、「遠野昔話」にも入っている笑い話「麦わらと炭と豆」など「グリム童話」のKHM18と全く同じものだし、これ以外にも「忠実なヨハネス」(KHM6:「絵姿女房」)や「歌う骨」(KHM28)、「手なし娘」(KHM31)、「千匹皮」(KHM63)等、数え出したならそれこそ枚挙に暇がない。)

前出した「昔話のタイプ」の Man and Wild Animals の項には美女と結婚する動物として、熊・犬・鼠・豹・象・猿・豚・猫・虎・狼・魚・鳥・蛇・亀・蜥蜴等々(更にあるが省略)が挙げられている。ここでは日本の「異類婿」として、特にお伽草子絵巻から「鼠草子」を、そして「異類女房」としては「日本霊異記」より「狐女房」(狐を妻として子を生ましめし縁)を取り上げてみよう。前者の絵巻からは当時の人々の鼠に対する思いや動物婿に対する見方が伝わってくるし、後者の「狐女房」は正体が発覚して動物が去って行かねばならない悲劇として終わっているのがほとんどである日本の昔話の中で、珍しくハッピーエンドとなっている作品なのである。

鼠草子絵巻

この絵巻を私は2012年秋にサントリー美術館で催された「お伽草子」展で見た。作品の成立は16世紀室町、桃山時代で、擬人化された鼠たちの様子が実にユーモラスに描かれていた。「鳥獣戯画」をはじめとしたこうした昔の絵巻を見ると、日本人のアニメ好きは決して今に始まった訳ではなく、先祖代々はあるかな昔から脈々と続いてきたことがよくわかる。

話は単純なのである。

京の都に住む鼠ごんのかみの権頭が、子孫が畜生道から救われるために人間と結婚したいと思いつく。清水観音に祈願すると、その甲斐あってある長者の娘を妻とする事ができた。権頭は彼女を寵愛したものの、清水寺へのお礼参りをしていた際に、不審に思った妻に鼠であることがばれてしまう。破局を迎え絶望した権頭は出家して高野山に入った⁽⁵⁾。

鼠と人間の女との夫婦関係は、男の正体を知った娘が逃げ出して、いともあっけなく破綻してしまう。(鼠が猫に食い殺されて終わる類話もある。)

古来、鼠は作物等を食い荒らし、世界でも化け物のような存在として退治される話は多い。ドイツでは例えば「グリム・ドイツ伝説集」の「ハーメルンの鼠捕り男」⁽⁶⁾ (Die Kinder zu Hameln)の言い伝え等良く知られている。一方日本では「鼠浄土」の昔話に代表されるごとく、鼠を神に関わる動物であるとの俗信があり、特に白鼠は農神うらで富の神とも信仰されてきた大黒天の使者だと言われていた⁽⁷⁾。「古事記」には大国主神が須勢理毘売との結婚に際し、彼女の父須佐之男命が色々大国主神を試した中に、鏑矢を野に放って取らせる話が載っている。大国主神がその野に入った時、なんと須佐之男命は火を放ったのだ。大国主神が逃げられずに困っていると、そこに鼠が現れて鳴いたのである。

「それで、よく耳をこらしてみると、その鳴き声は内はホラホラ、外はスブスブ、と、こう聞こえるので、足元の土を踏みつけてみたところが虚になっていたのじゃな。

オホナムチ(大国主神)はどすんと下に落ち入ったので、その中で身を縮めておるうちに、火は頭の上を焼け過ぎていったのじゃ。あぶないところじゃった。

そこへさっきのネズミが鏑矢をくわえて持ってきてオホナムチの前に進み出て奉ったのじゃ。⁽⁸⁾」

鼠は昔から人間の近くに住む一番小さな哺乳動物である。それだけにどことなく親近感がわく一方、別なレベルでは例えば「鼠浄土」にみられるように何かしら異界とのつながりを連想させ

たのかもしれない。鼠の男（権頭）は正体がばれると、日本昔話の中の厳しい鉄則通り何処かへ去って行かなければならない。しかし彼は「鶴女房」や「蛙女房」などのように悲しく去っていくのではなく、ましてや「蛇婿入り」や「猿婿入り」のように妻に殺されてしまうのでもなかった。鼠の権頭が出家して高野山に入ったという結末は、当時の人々が鼠を神に関わる動物と見なしていたことと深く関連しているのかもしれない。

「狐女房」

「グリム童話」では最後に魔法が解けて動物が美しい若者や王子様に変身し、女性と結婚してハッピーエンドとなる話が多いのに、日本では逆に、最初は人間に化けていた動物が何らかの切っ掛けでその正体を見破られ、去って行かねばならないという哀れな結末が多い。

人間が動物と結婚するなんて、考えただけでエロティックだけど、こうした設定が比喻にすぎないのは当然だろう。（尤も、滝沢馬琴の「南総里見八犬伝」のように、犬がお姫様に子供を産ませて、物語が展開していくといった創作もあるが。）

異類婿の動物たちはほとんどが人々に嫌われる存在で、蛇や猿は最後に殺され、その子供たちも異類女房では生かされるのが一般的なのに、異類婿では父と同様に殺されていく。

平安時代初期に薬師寺の僧景戒によって書かれた日本で一番古い仏教説話「日本霊異記」（八世紀頃）の第二話から、「狐を妻として子を生ましめし縁」という狐と結婚した男の話を取り上げてみたい。まずは簡単にあらすじを読んでみよう。

欽明天皇（510～571年）の御世、男が広い野原で出会った一人の美しい女を嫁に貰うことにした。暫くして女が男の子を産むと、偶然その家の飼い犬も子犬を産んだ。子犬はいつも女に向かって歯を剥きだして吠えたてるので、女は男に子犬を打ち殺してくれるように頼んだのだが、男は可哀相なので殺せずにいた。

二、三月の頃に、設けし年米を舂きし時に、其の家室、稲春女等に間食を充てむとして碓屋に入りき。即ち彼の犬、家室を咋はむとして追ひて吠ゆ。即ち驚き藻ぢ怖り、野干と成りて籠の上に昇りて居り。家長みて言吐く、「汝と我との中に子を相生めるが故に、吾は忘れじ。毎に来たりて相寝よ」といふ。故に夫の語を誦えて来たり寝き。故に名は支都禰と為ふ。時に、彼の妻、紅の襦袢の裳を着て窈窕びて裳襦を引きつつ逝く。夫、去にし容を視て、恋ひて曰はく、恋は皆我が上に落ちぬたまかざるはろかに見えて去にし子ゆ糸にといふ。故に其の相生ましめし子の名を岐都禰と号く。(10)（後略）

狐や狸は人を誑かして、その慌てぶりや間抜けさ加減を観察して喜ぶということになっている。しかし、美女に化けたこの狐と男の場合は、ちょっと状況が違っていた。初めのうちこそ狐は騙してやろうと思って男に近づいたのかもしれないけれど、次第に男の誠実さがわかってきていつしか本当に彼を愛するようになったのだろう。

狐の象徴性は、狡猾、卑劣、臆病、貪欲、詭計、狡い盗人等々少しもいいところがなく、その天敵は狼、熊、鷲、そして寓話の中では鴉や青鷲である。これらの動物以外に、狐にとって何よりも恐ろしい敵は人間で、ヨーロッパでは家禽を襲う害獣と看做されている他、狐狩りといったスポーツや毛皮を取るだけに狩られ、ドイツだけでも年に18万頭、北米では42万頭も殺されているという。こんな天敵である人間をからかったり、騙してやろうとする狐の気持ちはわからなくもない。

時代を問わず我々はいつも「賢い人」や「優しい人」、そして「美しい人」が大好きなのだから、狐が若く美しい女に化けるのも、恐らくそれが男を誑かす最強の武器であるのを知っている

からに違いない。この物語は嫁と小姑との対立とか、慣習の違いの溝、あるいは異民族との結婚とか、いくつかの解釈が可能であろうが、千数百年も前に書かれながらちっとも古く感じられないのは、そこに時代を超えて訴えかけてくるものがあるからだろう。それは何かと言えば、愛した女の化けの皮が剥がれても、男が少しも拒絶せず、それどころか依然として彼女を愛し続けて、「吾は忘れじ」とまで言っている点である。つまり男は女の表面的な美しさだけではなく、その内面的なもの全てを愛していたのだ。女が正体を現した段階で、百年の恋も一瞬のうちに冷めてしまうのが普通だろうに、彼はそうはならなかった。我々はこの男の真心を知って、全面的にそれを肯定したい気持ちになるのである。

時と共に肉体は衰え、顔にも皺が増えていくのだから、外見的な美しさのみを追い求めるのは時間への挑戦で、そもそも不可能な戦いであろう。昔話や寓話の英知は人間の美しさは決して外見だけではかることなどできないと伝えている。「白雪姫」のお妃はある日突然魔法の鏡に、「白雪姫はあなたより千倍も美しい」と言われて、ショックのあまり嫉妬に燃えて七歳の女の子を殺そうとした。人は年を重ねるうちに、年相応の美しさを発揮するものである。豊かな人生経験が顔に刻まれてくるだろうし、苦労はバネとなってその人を強くし、人生の更に高い段階へと運んでいくだろう。若い頃の外面的な美を老年になっても追い続けるなど、本当に滑稽な話ではないか。

それにしても、狐が男の所へ来ては泊まっていくので、この女を「来つ寝」（狐）と名づけることになったという後半部分のユーモアセンスは抜群である。こんな分かり易い因果物語を聞いた人々は、それこそ腹を抱えて大笑いしたに違いない。我々は何と粋な素晴らしい先祖様を持っていることだろう。

笑い話 — グリム童話「おいしいおかゆ」（KHM103）

次に「グリム童話」から「おいしいおかゆ」（KHM103）と「ものしり博士」（KHM98）という笑い話を二つばかり読んでいこう。

「おいしいおかゆ」は、「中途半端な知識は大怪我のもと」とユーモアを交えながら警告している。母親と少女が登場してくる昔話の場合、ほとんど例外なく主人公は娘で母親は脇役なのに、ここではよく読んでみると実はしっかりしている娘が脇役で、ドジな母親が主役であるのに気づく。つまり、童話としては非常に珍しい作品ととってもいい。

この母親からは子供のために一生懸命働くといった気概はまるで感じられず、彼女にはいわば成り行き任せのその日暮らしが性に合っている印象を受ける。彼女は夫と死別したのか、離婚したのか、あるいは未婚の母であったのか、短いテキストから窺い知ることはできない。食べ終わった後、おかゆの止め方を知らない母親は、一般的な大人の姿を代表しているのではあるまいか。我々は大人になるにつれて徐々に子供時代の記憶を失っていき、小さかった自分が一体何に感動し何を嫌がったかなど、いつの間にかすっかり忘れてしまう。子供の心を失わなかった者だけが、子供の世界に触れることができるのだ。

ところで、少女と母親、そして森の中に棲むお婆さんといった登場人物は有名な「赤ずきん」とよく似ているけれど、「おいしいおかゆ」にははっきりした悪の象徴である狼や、救済者の狩人は見当たらない。悪いのは貧乏と、止め方を知らないのにおかゆを作った母親であり、彼女の中途半端な知識は町中の人々を巻き込んで一大パニックを引き起こしてしまった。

「赤ずきん」の森に棲むお婆さんは病気で弱々しく、少女の危機に際して何もしてやれなかったのに、「おいしいおかゆ」のお婆さんは「少女の心配をちゃんと承知して」助けてくれる。少

女の救護者として現れる見たこともないこのお婆さんは、ロシア昔話によく出てくるバーバーヤガーにそっくりだ。ロシア昔話の主人公が森の先生から習得するのは、色々な魔法や動物への変身、鳥の言葉を理解する能力等々であり、不思議なヤガー婆さんはいつも森の中に住んでいるのだ。

「子供たちが森へ出かけていくということは死への旅立ちである」とプロップは述べている⁽¹¹⁾。それだからこそ、森はヤガーの住まいとしても、冥界への入り口としても登場するのだ。ただドイツの町はたいいてい周りをぐるりと森に囲まれており、一步町を離れるとどの方向へ行こうとも結局は森に出会うから、ドイツ昔話集に森の中での話が多いのもいわば必然的なことといえる。

お婆さんが少女にドイツ人好みの黒パンやソーセージではなく、おかゆの出来る小さな深鍋をあげるの面白い。日本人にとってのおかゆは（茶がゆなどの例外はあるものの）、一般に病人や幼児のための食べ物だけれど、今のドイツ人には一種のおやつで、彼らはおかゆに砂糖をまぶしたり、ジャムを入れて食べる。

黍の種類を指してドイツ語では一般に Hirse という単語を使い、本来の黍そのものは echte Hirse（本物の黍）と表現している。ついでながら、粟は「イタリアの黍」（italienische Hirse）、稗は「日本の黍」（japanische Hirse）と Hirse の前に国名を付けて表わすから面白い。

この Hirse は元々西ゲルマン語（Westgermanisch）で食物を意味し、更に遡ればイタリアの穀物の女神ケールス（Ceres）に関連する。ケールスとはギリシャでは穀物及び大地の生産物の女神デーメテルのことで、黍のおかゆをくれる不思議なお婆さんと、食物を生み出す母なる大地の神デーメテル（ケールス）のイメージは見事に重なるのだ。

ドイツには「大勢のコックがいると、おかゆを駄目にする」（viele Köche verderben den Brei）という面白い諺があるけれど、これはちょうど「船頭多くして船山に上がる」という日本の諺と同じ意味だろう。何事であれ、みんなが同じ様に知ったかぶりをしたり、あまりにも強く自己主張をしすぎると、話は決してまとまらず、とんでもない結果を招くことになる。俗語で Das wird einen schönen Brei geben.（直訳：それはうまいおかゆをくれるだろう）といえは「ひどい混乱を起こすだろう」といった意味で、恐らくドロドロしたおかゆが混乱のイメージに繋がっているのかもしれない。また、wie die Katze um den heißen Brei herumgehen（直訳：熱いおかゆのまわりを回っている猫のようだ）は「びくびくして容易に手を下さない（肝心なことを言わない）」ということ。この場合の「おかゆ」は、一番重要なおかゆを止める呪文を言えなかった母親にびったり結びついている。

こうして見てくると、森のお婆さんが少女にくれたおかゆは特にドイツ人にとって、様々な隠喩を含んだものであったのがわかる。

ゲーテの有名なバラード「魔法使いの弟子」を思い出そう。そもそもバラード（物語詩）なるジャンルが文学の中で確固たる地位を築いたのは、ゲーテ、シラーという卓越した二人の詩人の厚い友情のおかげである。特に1797年は二人のバラードの年と呼ばれ、両者は互いに影響し合いながら次々に傑作を競作していくのだが、この切っ掛けは二人が手紙でバラードの本質は何かを論じ合ったことであった。ゲーテの作品としては、シューベルトが曲をつけた「魔王」もよく知られているだろう。シューベルトはシラーの「人質」（Die Bürgschaft. D246）というバラードも作曲しているのだが、こちらの方は曲全体がほぼ二十分近い大作で重厚なテーマのせいか日本では今ひとつ人気がない。シラー作「人質」といっても知る人は少ないかもしれないけれど、実はこれは太宰治「走れメロス」のオリジナルテキストなのだ。太宰は「人質」をふくらませて、一つの短編小説にしてしまったのである。ゲーテの「魔法使いの弟子」に作曲したのはポール・デ

デュカ（Paul Dukas：1865-1935）というフランスの作曲家である。デュカが31歳の時の成功作であったこの曲は、ディズニーのアニメ「ファンタジア」の中で用いられて更によく知られるようになった。

魔法使いの老師が出掛けた隙に、弟子が先生のまねをして霊を呼び出す呪文を唱え、水と呼び寄せた。つまりここまでは、一種ドイツ版「門前の小僧習わぬ経を読む……」といったところである。

ちょっと水浴びしたかった弟子のために、呪文に応えた古い箒は、次に下男のようにせつせとバケツで水を運んでくる。水がいっぱいになったところで、弟子は箒の動きを止めようとするが、しかし彼はその呪文を忘れてしまったのだ。次第に部屋は水浸しになり、焦った弟子が斧で箒を真っ二つにすると、今度は二本になった箒は今迄の倍の量の水を運んでくる始末。

部屋が水で溢れ返って、弟子の力ではもうどうしようもなくなったところで、うまい具合に老師が帰宅して呪文を唱え、古い箒の動きをぴたりと止めてくれた。その時の呪文は次の通り。

隅に寄れ／片寄れ、片寄れ／古箒、古箒／なんじ本来箒の性／なんじに靈力授けて／使役しうるは／ただ練達の師あるのみじゃ（手塚富雄訳）

「魔法使いの弟子」も「おいしいおかゆ」同様、動かすことはできても止め方を知らない、とんでもない結果を招くのですよと警告している。ゲーテは「水」、グリムは「おかゆ」と、少々違いはあるものの、どちらも制御作用を忘れた危険の大きさに警鐘を鳴らしている点では同じである。止めることができないのに車を発進させるなら、それは人間を幸せにする便利な道具どころか、危険な殺人マシン以外の何物でもない。

考えてみれば、我々だって何度も、この魔法使いの弟子や、おかゆの止め方を知らない母親と同じようなことを繰り返してきた。（原発問題など典型的な例だろう。誰にも制御することができぬというのに、そういうことはまるで見ぬふりをするのだ）。大企業にとっては物を作り出すのが絶対的な使命であり、我々も今まで何の疑問も抱かずに、どんどん生産されてくる色々な物の恩恵に浴してきた。それはまさしく次から次に溢れ出てくるおかゆのようでもあり、倍になって働いた古い箒によって素早くもたらされた沢山の水のようにもあった。なにも物が無い時には売れ行きもいいけれど、徐々に物が人々に行き渡っていったなら、売れなくなるのは理の当然。だが、メーカーは飽和状態になっていても、まだこれでもか、これでもかと新たに物を生み出していく。

二つの作品は、とにかくどんな物であれ「限度を超えてありすぎるのは不幸を招く」と教えている。別のレベルでは、生半可な知識しかない者が知ったかぶりをすると、ろくなことがないといっているのだ。これは別段人間に限らず、一つの企業、あるいは一つの国と置き換えるのも可能だろう。生産性を向上させ、利潤ばかり追い求める散々公害を撒き散らした工場や、更に、なんとなく好戦的雰囲気酔いに酔いしれて、まるで誇大妄想を抱いた患者の如く、国を悲惨な戦争に導いていった人たちが活動したのはついこの前のことだ。将来の展望もなく、今の状況さえしのげれば良いと考えて突き進むのは、結局、魔法使いの弟子や呪文を知らぬ母親と少しも違わないのである。

話を戻そう。

「おいしいおかゆ」で呪文を唱えておかゆの侵略を食い止めるのは、魔法使いの老師ではなく、一人の女の子だった。彼女が戻ってきた時、町の家という家にはことごとくおかゆが押し込み、被害にあわず残っていたのはたった一軒の家だけだったという。この最後の家もおかゆに呑み込まれていたなら、侵略するおかゆの力は完璧で、太刀打ちできる者は誰もいないことになるのだ。

うが、一軒だけ残ったというところに小さな救いが残されている。ゼロと一とは決定的に違う。つまり、ゼロは比較のしようもない何もない状況だけれど、一はいわばスタートを表す希望の数字なのである。

無限を表すゼロに対して、一は有限を表す。一はヨーロッパ中世において、あらゆるものを呑み込んでいく最大の数字だったのである。人々は一と一を合わせると二ではなく、もっと大きな一になると考えていた。これは別段それほど難しい考えではなく、例えば以前は西と東とに分かれていたドイツが合わさって、更に大きな一つのドイツ国家が誕生したと考えてみるなら分かり易いかも知れない。

もの知り博士 (KHM98)

グリム童話の中に、クレープスという名の主人公が活躍する愉快な小話がある。そのドイツ語タイトル「Doktor Allwissend」は辞書にも「ものしり博士」と載っていて、後ろの形容詞 allwissend が「何でも知っている」の意味なのである。これが der Allwissende と名詞化されると「全知の神」を表すから、このタイトルは「何事も全てお見通しの博士様」といったニュアンスとなる。

主人公のクレープス氏は「何でも知っている博士」どころか、何も知らない貧しい農民なのだが、牡牛を買ってくれた本当の博士が結構なものを飲み食いしているのを見て、自分も博士になりたいと羨むのである。

「じきに博士になれるさ」(原文 das ist bald geschehen. は、直訳すれば「それは間もなく起こるさ)」という博士の科白からは、既に何らかの社会的な資格を持った人間のゆとりが感じられる。ある程度の社会的地位を確保するにはそれなりの努力が必要だが、しかしそれを手にした後で振り返ってみると、そんな苦労や努力は束の間のことのように思われるものなのかもしれない。原文の bald という単語には「じきに、間もなく」の他に「容易く」(leicht) という意味もあるから、「博士には容易くなれるさ」というニュアンスも含まれていたのである。

そして、本当に文字通り博士の言葉を信じてすぐにそれを行動に移す単純なクレープス氏の姿が、人々の笑いを誘う。外見もそれらしくして、広告まで出す博士とは一体何なのかという問題は別として、ここでは偽者が一番本物らしく見えるというパラドックスが生じている。更には、博士なんて所詮この程度のものでしかないんだよ、といった皮肉すら垣間見える。

ここまではクレープス氏が偽博士になった経緯で、次に話はいよいよ笑い話の核心に入っていく。ある紳士に、盗まれた金を探し出してほしいと頼まれた彼は、妻を連れてその紳士の家へと行き、まずは予ねての願い通り御馳走にありついた。

料理を運んできた召使を見た偽博士が、「これが最初のだ」(das war der erste.) と言うと、実はその召使が本当の泥棒で、自分のことを言い当てられたと勘違いしてびっくりするという落ちである。要するに、偽博士は単に「最初の」と言っただけなのに、言われた方が勝手に「泥棒の最初の奴」(der erste Dieb)の意味に取ってしまったということだ。こんな他愛のない勘違いは、我々の日常にごまんと転がっている。噂が噂を呼んで、社会が大混乱に陥ってしまうことだって大いにある。スマトラ沖大津波の後では、小さな地震の時さえ、再び津波がやって来るとの不安から、人々はこぞって避難していたのである。

メルヘンの鉄則通り、ここでも三人目の召使までクレープス氏に自分たちが犯人であるのを見破られてしまったと思込んでオドオドし、そして四番目の召使が持ってきた覆いをした大皿の中身をクレープス氏が当てるところが、この小話のハイライトだろう。聞き手(読者)はここで初めて、クレープス(海老)という名が重要な布石となっていたのがわかるという訳だ。つまり、

中に何の料理が入っているか皆目分からなかった偽博士は、「何ということ、クレープスもかわいそうに！」と自分の名を口にすると、そしたら中には海老が入っていたという次第である。ドイツ語のクレープス (Krebs) にはザリガニの意味もあって、大きな鋏で何かにしがみ付き、一途にねばりぬくといった性質を、クレープス氏の性格とオーバーラップさせているのかもしれない。

因みに、Krebs は複数形で甲殻類一般を指し、単数形では海老、ザリガニ以外に病気の癌を意味する。英語で癌を表す cancer の原義は海老ではなく蟹で、悪性腫瘍を取り巻く血管が蟹の脚に似ているのがその理由だという。同じ病名をドイツ語は海老に、そして英語では蟹と同語にしているのは面白い。

さて、物語は更にもう一つ愉快的落ちを用意していた。ストーブの中に隠れていたもう一人の男が、「とにかく中にいるんだろ。お前も出てこなくちゃね」との偽博士クレープス氏の独り言を、てっきり自分に向けられたものと思い込んで飛び出してきたのである。実は、博士はただ本の中の雄鶏の絵を探していただけだったというのに。

ヨーロッパの昔のストーブの大きさが、それこそ大人二、三人が楽に入れるぐらいの大きさがあるのを理解しておかないと、この箇所は我々には少々わかりにくいかもしれない。英語には「かまどに隠れたことのあるものにかぎって、かまどに隠れているものはないかと覗きまわる」(No man will another in the oven seek except that himself have been there before.) といった諺もある。要するに、「悪事を働いた者は、他人も同様だと思う」という意味である。

註

- (1) Brüder Grimm : Deutsche Sagen : Winkler Verlag. München. 1956.
“Sie (die Märchen) nahren unmittelbar, wie die Milch, mild und lieblich, oder der Honig, süß und sättigend, ohne irdische Schwere ; dahingegen die Sagen schon zu einer stärkeren Speise dienen, eine einfachere, aber desto entschiedene Farbe tragen und mehr Ernst und Nachdenken fordern.”(S. 8)
- (2) Theodor Benfey : Kleine Schriften III : Berlin. 1892.
- (3) A. Aarne/S. Thompson : “THE TYPES OF THE FOLKLORE” (A CLASSIFICATION AND BIBLIOGRAPHY) : SUOMALAI NEN TIEDEAKATEMIA ACADEMIA SCIENTIARUM FENNICA : HELSINKI. 1981.
- (4) こうした昔話は俗に「美女と野獣」(Beauty and Beast)、略して B and B と言う名で呼ばれるという。
(大島建彦「お伽草子と民間文芸」。民俗民芸双書)。岩崎美術社。1977年。
- (5) 「お伽草子」参照。サントリー美術館。(カタログ)。2012年。
- (6) ibid (1)。ハーメルンと鼠の関係については阿部謹也「ハーメルンの笛吹き男」一伝説とその世界一。
平凡社。1985年。参照。
- (7) 稲田浩二他「日本昔話事典」。弘文社。平成6年。
- (8) 三浦佑之「古事記」。文芸春秋。2002年。
- (9) 中田祝夫校注「日本霊異記」。小学館。1989年。
- (10) ibid (9)
- (11) ウラジーミル・プロップ「魔法昔話の起源」。斉藤君子訳。せりか書房。1988年。

参考文献・資料

関敬吾「日本昔話集成」(1) 動物昔話。角川書店。昭和25年。

日本民話の会「日本昔ばなし100話」。国土社。1986年。「ねずみ浄土」

「日本の昔話」(小澤俊夫再話)。福音館書店。1999年。

(1)「蛇婿入り」・「猿婿」 (2)「きつね女房」・「豆と炭とわらの旅」

(5)「つる女房」

野村純一・敬子編「雀の仇討」。東北出版企画。昭和51年。

大島建彦校注「お伽草子集」。小学館。1989年。

桑原博史訳注「おとぎ草子」。講談社学術文庫576。昭和57年。

ジャン・マルカル「メリジューヌ」中村栄子・他訳。大修館書店。1997年。

マックス・リュート「昔話と伝説」高木昌史・他訳。法政大学出版局。1995年。

マックス・リュート「ヨーロッパの昔話」小澤俊夫訳。岩崎美術社。1969年。

アンティ・アールネ「昔話の比較研究」関敬吾訳。岩崎美術社。1969年。

関敬吾「昔話と笑話」。岩崎美術社。1977年。

小澤俊夫「昔話のコスモロジー」。講談社学術文庫1146。1994年。

Brüder Grimm : Kinder- und Hausmärchen : Wissenschaftliche Buchgesellschaft. Darmstadt. 1989.

Johannes Bolte/Georg Polivka : Anmerkungen zu den Kinder- und Hausmärchen der Brüder Grimm.

Dieterichsche Verlagsbuchhandlung. Leipzig. 1913.

「未来」。未来社。金成陽一「小さな残酷、大きな残酷そしてメルヘン」(No334)

金成陽一「メルヘンの役割」(No336)

金成陽一「エロチックメルヘン」。講談社。2008年。

金成陽一「まだあるグリムの怖い話」—グリム・ドイツ伝説集を読む—。東京堂出版。2012年。